(3)　神経芽細胞腫マス・スクリーニングにより発見された症例について

武　田　武　夫（国立札幌病院北海道がんセンター小児科）

【研　究　目　的】

昭和56年に初めて神経芽細胞腫のスクリーニングの研究班が作られてから約４年間を経過しようとしている。この間，乳児数１～２万人に１人という，予想に反した高い発見率であることが分ってきた。また発見症例の登録が行われてきており，昭和59年12月31日現在，当研究班で把握している症例数は36名に上っている。これらの症例について分析した。

【結　　果】

上記の如く昭和59年12月末日現在で計36名であり，その年度別，自治体別の内訳は表１に示す通りである。このうち生存中が34名（94.4％），死亡は２名で，１名は再発，１名は術後の合併症であるのでこれを除外すると腫瘍による死亡は35人中１人2.9％となる。

主な項目別の分析結果は次の通りである。

第１回検査を受けた年令５か月：１人，６か月：14人，７か月：13人，８か月：５人，９か月：３人で６～７か月が最も多い。診断決定時の年令では７か月：12人，８か月９人，９か月：９人，10か月：５人，12か月：１人と７～９か月が多く初回検査から診断の決定まで１～２か月を要している。

診断手技別ではエコーが未実施３名を除くと，所見あり26名（78.8％），なし７名（21.2％）であるが，リンパ節転移も抽出したと記載のあるものもあり診断手技上の問題も考えられる。

レ線所見に関しては，設問がレントゲンのみであったため記載の内容が分かれてしまった。単独，IVP，CT，Angioの各項目に分けて後日，調べ直す必要がある。

腫瘍の重さは，10g＞1，11～20g：6，21～50g：15，51～100g：6，101g＜7，不明１であった。

原発部位は，副腎左15名，右９名，後腹膜腔７名，縦隔洞３名，不明２名であるがこのうち１名は腹部である。

症状はあり１例（2.85％），なしが35例（97.2％），腫瘤触知できたもの19例（困難３例），できなかった17例（全麻下で4例）。

病期はⅠ10名，Ⅱ14名，Ⅲ３名，Ⅳ６名，Ⅳs 2名，不明1名であった。

この時期において既に病期の進んだ症例があることから，今後とも症例の追跡，予後の調査を長期に亘り正確に行って行く必要がある。

表１　年度別，自治体別発見症例数

	58.3.31まで	59.3.31まで	59.4.1～59.12.31	
札　幌	4	2	5	
埼　玉	0	1	3	
東京（世田谷）	0	1	1	
神奈川	0	0	1	
愛　知	1	0	0	
名古屋	5	0	0	
京都市	6	1	2	
大阪市	0	1	2	
	16	6	14	計36人

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

【研究目的】昭和 56 年に初めて神経芽細胞腫のスクリーニングの研究班が作られてから約 4 年間を経過しようとしている。この間,乳児数 1〜2 万人に 1 人という,予想に反した高い発見率であることが分ってきた。また発見症例の登録が行われてきており,昭和 59 年 12 月 31 日現在,当研究班で把握している症例数は 36 名に上っている。これらの症例について分析した。